全聖徒主日（聖霊降臨後第２４主日）

２０２４年１１月３日

風のように

甘木教会

牧師：竹田孝一

事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである初めであり終わりである。

ヨハネ黙示録２１：６

【説教要旨】「おびただしい証人の群れに囲まれて」

100年を超える日本の教会の歴史の長さは、同時に教会員の高齢化で、天に帰られた方々が多くなりました。また、日本の教会も西欧の教会の風習に倣い始め、11月1日の「全聖徒の日」に近い第一日曜日に「全聖徒主日」として礼拝を守るようになりました。

私たちの教会は、今年、共に歩んだ近藤郁子さんを天に送りました。

地上における別離の悲しみが深ければ深いほど、天上においての再会の喜びは大きいなものとなっていると思えてなりません。だから、地上を生きていたとき以上に、先に天に帰られた愛する方を私たちは、意識をするのではないでしょうか。ふと、「今ごろどうしているのか」と。せんないことです。しかし神さまの懐にいるのですから幸せに違いありません。

私たちに信仰を通して与えられている約束はこれです。「**神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとく拭い取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去った**」（黙示録21:4）

ヨハネ福音書に「**わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。**」とあるように天上に生きる者、地上を生きる者と結ばれています。

ルターは娘マグダレーヌを幼くして亡くしました。その墓碑にルター自身が次のように記しています。

わたしは恐れずに眠りますと
ルターの娘レーニッヒェンは言う
彼女はここに横たわっている
わたしはここに小さなベットに
休んでいます。
永遠にわたしは失われたままでいるはずでした
なぜなら、私は罪の中に生まれたからです
しかし、いま、わたしは生きています
そして幸福です
なぜならキリストが
その血汐をもってわたしを贖ってくださったからです

この墓碑からルターが死ということを聖書によって受けとめていることが分かります。聖書は「罪の報酬は死である」というのです。「罪」、それは、神との関係が断たれていることです。ルターはその碑で「**永遠にわたしは失われたままでいるはずでしたなぜなら、私は罪の中に生まれたからです。**」というように死は単なる自然的な死でなく、死は神との関係が断たれた、つまり「**永遠にわたしは失われたままでいる**」状態を顕すのです。「主よ、主よ、何故に私をお見捨てになられたのですか」と十字架の死の直前にイエスさまは神に叫びます。

「罪の報酬は死」をイエスさまは受けられました。

ルターは娘の臨終にあって「今や死の床にあって臨終の息を引き取ろうとするとき、父はベットの前にひざまずき、激しく泣き、神に御心ならお救いくださいと祈った。」とあります。悲しみと恐怖と向かいあいながら主にある平安と、また恐れとが交錯する一日一日のなかで、「私は時々少しばかりの讃美を

主に歌い、神に感謝するだけで、心から神に感謝していないことに私自らに対して怒りを覚えます」という複雑な気持ちを吐露します。愛する人を天に送るとはルターの気持をイエスさまは十字架において受け止めてくださっています。イエスさまを信じる者にとって、死を前にして次のように語りえるのです。

「**しかし、いま、わたしは生きています。そして幸福です。なぜならキリストがその血汐をもってわたしを贖ってくださったからです**」と導かれるのです。キリストの死は、「**神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとく拭い取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない**」ということを私たちに示してくださいます。死の只中に**神は自ら人と共にいて**くださるのです。

死の怖さを理解する者が「**しかし、いま、わたしは生きていますそして幸福です**」と達する勝利の言葉を与えられるのです。

「**わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。**」とあるように先に天に召された者も私たちもキリストに結びつけられているのです。イエス･キリストによって永遠の命を結ばれ私たちは死に勝利しています。

今、ここに先に召された方々の写真があります。皆さんは生きています。そして幸せです。さらに天において天使に等しいものとされています。この天にあって愛する人が、この地上において苦しみを背負って生きている私たちのために祈り、愛していてくださいます。遠いところにいるはずの愛する人が誰よりも近くにいて愛を示してくださっています。「**しかし、いま、わたしは生きていますそして幸福です。**」私たちは信仰において語れるのです。

わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負い、（イザヤ５３：１１）神は自ら人と死のところまで共にいて、私たちの神となり、私たちの目の涙をことごとく拭い取ってくださっています。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もありません。

日毎の糧

地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、
主のもの。　　詩篇 24：1

ルターの言葉

死をひどく恐れないで、むしろ神の恩恵をほめたたえ、愛すべきである。

「生と死の講話」金子晴勇訳　知泉書館

主のもの

「世界」とは、地上だけでなく、天上をも含めて表しているのではないだろうか。私たち信仰者は世界というとき、地上と天上の世界を意識するのです。

「世界」を支え、守ってくださり、私たちと神はおられます。主は、大海の上に地の基を置き、潮の流れの上に世界を築かれた。

神の創られた世界を生きるのです。そこには、「それは潔白な手と清い心をもつ人。空しいものに魂を奪われることなく、欺くものに誓うことをしない人。主はそのような人を祝福し、救いの神は恵みをお与えになる」とは全く逆の私がいます。では、救はれないのでしょうか。イエス・キリストが来られました。詩篇は預言します。「栄光に輝く王が来られる。」と。イエス・キリストが共にいてくださり、「それは潔白な手と清い心をもつ人。空しいものに魂を奪われることなく、欺くものに誓うことをしない人。主はそのような人を祝福し、救いの神は恵みをお与えになる」とされています。

私たちは、「主を求める人。ヤコブの神よ、み顔を尋(ﾀｽﾞ)ね求める人」とされています。それはこうも言えるのです。主を尋ね、求めることこそ、私たちが生きるということです。

祈り：神よ、あなたの世界に生き、主の者とされている私たちを生涯、主を求めるものとしてください。アーメン。

牧師室の小窓からのぞいてみると

衆議院選挙が終わり、自民党、公明党に厳しい結果となった。

今回、気づいたことは、ヨーロッパと同じような潮流となっているような右翼化である。

外国人労働者を排除することを党是としている党が議席を得た。しかし、地方にいて、アジアの人々によって、農業、中小零細の下請け企業、介護など多くの分野で底支えをしていることを身近に感じている。これで良いのだろうかと感じている。

むしろ、そのアジアの子どもたちがきっと日本に定着していくだろう。今こそこの子どもたちの教育を高めていくことが将来の日本を確かなものとするのではないだろうか。しかし、移民に寛容であり、施策が充実していたスウェーデン、ドイツでも移民排除の波は凄い。そこでどうしてなのか、最良の方法はと考えていくことも政治家の働きではないか。

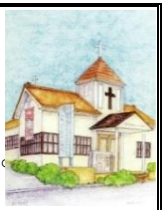
公明党の退潮は、支持母体の創価学会の高齢化であるという。「池田大作撮影の写真展」に数年前に行ったことがある。その時、高齢化を肌で感じていた。既成宗教の高齢化は顕著になってきている。これは、同時に若者の宗教離れを表していている。私たち自身が変わっていかなければならないことを突き付けられたように思う。

コヘレトは「今あったことは、昔もあった」と言う。歴史を紐解いて、今を考えるチャンスだ。

園長・瞑想？迷走記

キリスト教関係の設置者・園長研修会には出ていたが、全国私立幼稚園研修会には初期は出ていなかった。しかし、幼稚園行政が大きく変化していくなかキリスト教の研修では情報、向かうべき方向を得ることが出来ないと思い、思い切って、全国私立幼稚園の研修に出ていた。その情報、指針は政治をも動かすすごいものであって、大森、羽村の運営、経営は先手を打てた。この世の子より賢くあれということを実感している。

甘木通信



祖父は宮大工だった。祖父が残した大工道具が、我が家にしばらくあったことを思い出す。今になればあの大工工具はどこにいったのか思うと口惜しい。我が家には下駄箱がなく、祖父が下駄箱を作ろうとしてくれたが、その途中に癌でなくなった。残され部品を母が組み立て、完成させ、しばらく使っていたことを鮮明に覚えている。どこかで、祖父の仕事を見ていたのだろうか。

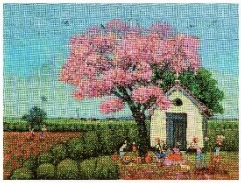
今回、奈良にいくので、薬師寺を再建した法隆寺・宮大工・西岡常吉さんの「宮大工棟梁・『口伝』の重み」という本を読み返した。その中で薬師寺を今日の様に再建した私の好きな高田好胤管長の思い出が記されていた。

「金堂の上棟式の時、管長などの名を書いた棟札をまつる。高田管長は当時から忙しく全国を駆け回っており、時間がなくなって橋本長老が『高田好胤』と棟札に書いた。式の当日、装束して式場に向かう私に、高田管長が寄ってきた。怒っている。『自分の名は棟札から消すようにと、さんざんいっておいたのに。西岡さんの名前、書きなはれ』。

我執なく、身を捨てられる人、この人なら、伽藍の復興もできるのではないか・・・。」

伽藍復興のときの逸話である。「『どのぐらいで建つねん』というたら『十億円ぐらい』とこうですねん。『お写経一巻が千円や、百万巻。しかし、宗教家というものはできるよりも、理想に、永遠なるものに向かって努力する、それが宗教的決心ということやないか―。』その通りと今も私は思っている。

（甘木日記）土）キリスト教講座、「日本の讃美歌」について話す。明日の宗教改革記念日礼拝の準備し、甘木へ。日）宗教改革記念礼拝を共に終えて、午後から園庭でブラジル式焼肉、日田焼きそばとみんなで記念日のお祝いの食事会。月）全国私立幼稚園連合会研修で早朝から、奈良に向かう。主題講演は知の深い人はこうも幼子と遊べるのだということを実感。火）分科会、多くのヒントを与えられる。水）休暇を取り、神戸に。木）今日から幼稚園。夜は甘木へ宗教改革日の音楽礼拝。金）入園願書受付。何人、来るかとドキドキ。誕生日会。夜は激しい雨。土）唐津教会を訪問。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。ぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）早くから甘木教会に行く。今日の「キリスト講座」、明日の午後からの集まりもありいつものより荷物が多く、重かったが、駅までこちらが言わずと考慮してくださり迎えに来てくださったことに心から感謝。講座は「日本の讃美歌」であり参加者もくださる。その後、出席された方と綺麗な川の自然に出来たクレソンを取りに行く。自然の豊かさを知る。たまたま坂本龍一さんのことを話す先祖が天草から逃げてきた場所に連れて行って下さった。歴史を感じる。日）宗教改革日記念礼拝。午後から園庭でお祝いのブラジルの焼肉、日田焼きそばと豊かな祝会になる。インドネシアの青年らも参加くれて楽しい時間となる。こういう交流をこれからも続けていきたい。月）早朝に「全国私立幼稚園設置者・園長研修会」で奈良へ行く。国立博物館の先生による「大仏さまと子どもたち」という話は、幼児に大仏ということ説明し、これが幼稚園でどう展開していたかという実践講演で、まさになら奈良ならの幼稚園教育であった。文科省、家庭庁の説明は現状の整理が出来た。火）研修、二日目。分科会で「経営」で「持続可能の園経営」について学ぶ。帰り自園活かしていかなくてはいけないと強く感じる。昼は出席していた次男と夜は長男と食事。私が死んだら妻のことを頼むと財産などを説明した。家内さえ幸せになればよい。前議長と夜、お茶話、これも楽しい。水）夏休みもなく、一日、休みをもらって夫婦で神戸の西洋館を見にいく。たまたまブラジル移民を送った研修施設が記念館になっていて見学が出来た。そこでブラジル国花、イッペイの苗をいただく。最後の一本だった。最高のご褒美をいただく。木）幼稚園を終わり。夕刻、「宗教改革記念日礼拝」のために甘木に向かう。少し違った音楽礼拝をする。ルターの讃美歌の讃美、「神のはわがやぐら」のルターの讃美歌を巡って展開。皆がしている一フレーズを編曲した前奏曲、原曲で歌うのでなく、転調して日本人の音域に合うように讃美すること。さらに皆が知っていた曲をルターが編曲し、これに詩を重ねたということを讃美歌の讃美。帰りにイッペイの苗を植えて帰る。金）入園願書の受付。悲喜こもごも。前を見る。誕生会、夜、唐津に向かう。小城に帰る職員にわざわざ唐津まで送っていただく。土）唐津で夜中に雨の警戒警報のアラームが鳴る。受洗牧師の唐津教会を訪問。感謝。